



經補  
 正  
 佛說華嚴經疏  
 附錄  
 五

^ 5  
 4307  
 5







門 へ 5  
4307  
5

雜之卷目錄

賦物之事

兼  
オ

和漢の事

ハ

万句千句上頁韻

百韻の式

ハ

米字の式

ウ

七上候の式

ウ

易の式

ハ

源氏の式

ハ

五十韻の式

オ

四十四の式

オ

歌仙の式

オ

長哥行の式

オ

短歌行の式

オ

十八公の式

オ

首尾の式

オ

表合の式

ウ

雜目





發句の事	三	脇句の事	三
第三の事	四	四句目の事	四
月花定座	四	去嫌大意	五
句數並去嫌	六	季節の跨物	七
嫌古式八ヶ條	八	指合の事	九
正花の事	十	戀の詞	十一
切字の事	十二	発句の格	十三
押字の格	十四	抱字の格	十五

增補 俳諧歳時記 雜之部 曲亭主人纂輔 江戸 藍亭青藍増補

一卷之式 賦物

から、俳言をて賦を連哥おれ、端作りとも俳諧之連哥と書さく、○蕉門お賦物の沙汰ある、心ど心得のこゝ小大略と記さ、**草**賦物の文字耳小立字八面を撰、賦し物の文字、まごまりる文字とをわらん、五箇ふどりの事おれ、発句おちこがひ真わの文字とを、たとへ山櫻の発句お犬とを、うらむと、犬山おこと、故く蜂魚くを、こもるべし、餘はこも小准、一字露頭二字区音以下百韻の俳諧を、とをべし、らと、云

賦何衣連哥  
 年毎ふみまどとと花ハ櫻の節  
 賦何袋俳諧

あれもふとら何い、なよ世々の春  
 らんハ上賦とらふのあり、端作りの何とら、字ハあどく  
 のやうなる物や、句中の春とら、字と呼を、とら、











表六句目月裏六句目花〇支考云首尾の吟ハ二座の時宜あり或ハ奉納の諸願と祝し或ハ歳暮歳旦の賀ありと始終をこのつゝの意ありとハ六々ともハ々とも

**表合**

表と裏の首尾と合せて月花二座模倣や

八句七句西華集支考凡例ニ云此表ハ神祇あり秋教あり意無常と云らまハ名所とハ人の名とのハ一巻の始終と云ふつゝ心あり

湖東問答去来云去秋考爰ハ旅寐して卯七と表合あり我ハ詰て曰ハ表合ホの非諸ハ尋常の式と替るべし表の内ハ一巻の姿とて去来もともあつち用ふまき事ありと云へり一段

面白く〜と答ぬニ子諸抄云二座の巻頭

**發句**

あはれハ宗匠貴人老あはれハ宗匠貴人老よて公卿小聞あつるを思

人の外あつ〜も句の体伸くと和く詞もさらふ心さの〜らび〜テ切字の道理ハ切字の条ハ注を

**脇句**

發句の時節と違へむその餘情といひらべし發句神叙意無常時宜述懐あはれ脇句も同〜〜との何らひあへし發句雜多ハ脇句雜多ハ諸抄云韻とてあつて留る事あきあつもあらぬと切者の業

あはれハ初心のよる〜あはれと云いす〜あはれ〜

あつてその故と明〜青藍桜むるハ脇ハ哥の下の句ハ

〜上の姿と〜け結ぶを正格と也但ハ發句脇句ハ限らぬ長句ハ意と残し短句ハ

意と結ぶ〜と未練あつて〜あつて留る時ハ意残りて

脇句の体と失ふ〜ハ初心のよる〜あはれと云い

むた〜との故と〜文字うて留る時ハ太く

意切て脇句の体と失ふ〜ハ字留あり〜と云へり

〜てふ〜て留る例〜ハ續虚栗たび人と我名

よむれ〜初時雨芭蕉又山茶花と宿を〜て由之冬

の日霜月や鶴の行〜あらび〜荷兮冬の朝月哀

あり〜芭蕉曠野〜の名も〜

春の草荷兮打〜蝶の夢〜芭蕉

諸抄云丈高く脇句ハ轉〜と云へり句がら〜

ハ才三の本意小あら〜第三ハて留ふ留ら〜留の〜

〜て〜云〜これもこの故と明〜青藍桜むるハ

發句の姿ハ轉〜め〜意と残して下句ハ及〜

と才三の格と〜其故と〜も〜

〜て下と結ぶ〜大〜意残り〜才三の体と失ふ















山雀、日雀、四十雀

この類ハ秋のうご小耳を  
もれハ帰るとも行とも  
遊

春あれど度々  
駒鳥

春あれど度々  
秋も用ふべき也、  
裕

鯉

秋の一字と断れども、秋よ  
掛之  
羊の暮と定む  
此の例あり

野遊

春ハ摘菜の遊びより、秋ハ茸  
狩の真ありて、決て春秋の二季

鴉飼

鴉舟ハ桃の節供ふとありて、菊の節  
供ふ終るれども、鴉舟ハ春の気

節供

何の節供と断  
らざるとも、春夏

鮎、藻

藻ハ上下の字と断れ、鮎ハ  
若くハ落葉のハ、鑑

祭

四季ハ物ハ祭ハ、鷹の類あれど、  
其季の名目として、四季の差別とせむこと

鷹

其季の名目として、四季の差別とせむこと

俳諧ハ多用あれバ、其名目と断るハ及ばず、其句  
の季ハついで決して、四季ハ用ふべし、以上貞亨式  
より抄出せ

古法可有取捨事

杜鵑、深見草

柳、櫻、鶯、螢、杜若、芭蕉、蝸

此十品ハ象物の數量あり古抄ハ此  
類と音訓ハ替異名ハ呼でハ、三ツとせ

牛、鶴、鴿

此十品ハ象物の數量あり古抄ハ此  
類と音訓ハ替異名ハ呼でハ、三ツとせ

四ツとも免れ、今ハ俳諧の式目ハ、一座ハ只一と  
定め、古ハ今ハ取捨とハ此謂あり、右ハ十品の名目を  
舉て、万物万象の  
凡例とあせあり、

去嫌可有斟酌事

父、母、男、女

主、誰、身、獨、媒

此四品ハ人倫の凡例あり、  
此類ハ二句づ去べき也、

僧、寺

此二品ハ古式  
定て、指合とせむべし、



居所しよ△非ひ△とと△いい△ども△今式いましき△親王みこと△皇女みま△天童てんどう△

△天女てんじよ△帝てい△御門ごもん△仙洞せんどう△新院しんいん△鬼おに△

佛ほとけ△此十品ハ古式ハ色々の説あれども人倫少ハ二句ズ去き△去き△去き△去き△御門ハ居所ハ三句去き△

若菜わかしき△郭公くわくこう△松虫まつむし△水仙すいせん△水鶏すいけい△

三日月△尾上おしんがへ△此七品ハ會意の名目△決してニツハ有あ△有あ△有あ△有あ△會意△

二字三字の意を會めてその名と作る△雪△雨△故あり△字と造る△六書の一△名あり△

古式△此二品ハ雪四ツ雨二ツとあれども△虫△魚△名類△あ△と△を△雨△と△四△ツ△あ△れ△を△し△

馬車△飯△餃△茶△酒△此八品ハ日用の物△あれ△ハ△二座△ハ△二△ツ△

有△松△小△子△の△日△月△小△更△科△花△よ△

芳野△此三品ハ連哥の沙汰△鐘△鉄將△

瓜木△小△妻△歎△小△木△篠△小△佐△々△羅△

翠簾△の△昔△小△水△邊△山△伏△小△山△類△夜△

分△此七品ハ古式の嫌ハ物△あ△れ△閑△伽△庭△火△

轉寝△眠△の△字△起△の△字△虫△砧△

此八品と古式ハ夜分と定められども今式△冠△

烏帽子△綿△小△木△棉△夕△立△小△雲△

雨△小△笠△鷹△鳥△狩△此五品ハ古式ハ附句△嫌△

嫌△へ△總△て△彌△生△師△走△此二品ハ古式△も△異△名△の△月△を△



附へしとぞ打越と嫌ふ  
はりの古今の通式あり

指合可有分別事 △あそとあり △

頃とあり △ふとあり △てとあり 此四品ハ

古式ハ大事とあれど △老 △親子 此二品と古式ハハ迷懐と成せり

今式ハ子細あり △鳴子 △網 △花鳥の繪 △花 今式ハ子細あり

小櫻 △楓 △紅葉 古式ハ鳴子ハ縮と守る故ハ植物ハ二句去とやいふ意

のいふふふとハ分別ハ及むとて生類ハ二句去べし細魚鳥と二句去の例あり或ハ草木鳥獸の繪ハ其季くと持あつて生類植物ハ嫌むとともどもと雑とあさハ論あらん季と持二句去去きあはれらハ絵の月喻の花の例あり凡雅の賞翫とあせら花のみちの二品と櫻と花ハ面とらりて軽く楓と紅葉ハ折と

嫌ひて重し何とて二品の差別あり花ハ三春の艶といひ紅葉ハ三秋の色といひて櫻と楓ハ其体あり花と紅葉ハ其用ありこの故ハ花ハ櫻ふあはれ櫻ふあはれあわはれとハ我門の正花論あるとや爰ハ論せハ櫻ハ楓と花と紅葉ハ面とらりて只一ツあつて異体ハ例の數とさごめむ

千句有一物之事 △鬼 △虎 △龍 △

女 此四品ハ連俳の差別あり新式の一座一句とら所ハ允五十余名われども多くハ連哥の用として俳諧ハ不用あり鬼味噌といハ龍門とハ異体ハ例の數とさごめむ

花鳥有二物之事 △柳 △櫻 △鴈

△燕 △鶯 △菊 △千鳥 此七品ハ古式より一座一句の物あり

とぞと花鳥の二品ハ四花八月の賞翫ハ效ひし一座ハ二句つて有べきとあり花鳥の名ハ代々小考へし



△冬牡丹 △冬椿 △冬梅 △紅梅 △

緋桃 △梅櫻の紅葉 △山吹 △郭公

此八品ハ花鳥の中を只一句で二句ハあまうづき物の九例あり此段の詮用ハ二句ありき異体ハ只一ツにて二句ありきき同体ハ二とあせふ二句一意の用とあまうづきあり

日用可輕物之事 △昔 △曉 △庭

△垣 △袖 △襟 △湯 △汗 △文 △使

此十品ハ古式ハ一ツとあれ △照 △曇 △泣

△笑 △植 △荇 △眠 △覺 △起 △居

△目 △鼻 △耳 △此十

△口 △手 △足 此六品ハ支体の躰まこと正語の用多けしを折と替て四ツ

有り

无可不審旋之事 △老 △福神 △

親子 元中古の式目と論まふ第一連俳の用と不用とをまへて連奇は艶詞のあをを

学び才二の意の理窟とそとひて滑稽言ふ談笑の和とあまうづきより今の俳諧の扱ひとい雲泥のちがひある事ありそれが中めと不審をまき沙汰ハ老と述懐を表ハ句ふ嫌へと福の神ハ嫌をまきと色さるハ彼のハ理窟あらめと命の字とめて述懐とあまうづき親子とつづけるハ述懐あらまうづき何故か殆どあり

稻妻 △電光 △烏鵲の橋 △龍 △民

の寵 古式ハ稻妻電光と天象を嫌をまきと鳥鵲の橋と生類をまきと龍と生類ハ嫌



むとむ武の電ハ居所わらざらむとむとむ不審  
のまふ用ふべき也但ハ今式の道理ふまうせて嫌ふ

△青柳 △菘 △櫻人 古式ハ青柳詠ハ  
春として植物ふあら

むとむ菘詠ハ秋もあむと生類もあむと冬もあむ  
櫻人詠ハ春の季と持て植物ハ三句ざら入倫も二

句さうも同三品の詠物ハ三色のちがひあむとむとむ  
三別の道理ありとも道ハ一貫の日あつらん今式はより

去嫌ハ一 △泪の露 △泪の雨 △青楓 △  
例さうむ

檉鳥 泪の露ハ降物ありて泪の雨ハ降物もあら  
むとむ御今の細叙も不審あり青楓と

秋とつゝ察するも姿情のさうむ青の字ハさうむ  
秋の姿はわらむと楓ハさうむ紅葉の体もさうむ若楓の

下とさうむ若楓ハ夏ありさうむ青楓もあむとむ  
雨所ふ雨注のちがひあむとむ不審の不審とや

いさむ檉鳥と雜とさうむと掠鳥ハ勿論あて菱喰も豆  
まらむとさうむと実と好む名ありさうむ論あむ秋とさうむ

曾不及論物之事 △雪小霰 △椿

小花 △蓮小實 御今ハ雪ハ霰ハ附句と嫌ハ  
む椿ハ雜あり花と結むとさ

春あり蓮の実ハ夏あり蓮の花とも実を結ぶ  
物ありといふとさうむ今式ハ曾て論あむと

右古式とむと蕉門一派の確論むと蕉翁の  
授記こと貞享式ハ載さうむ爰ハ其大畧と記を

のこ本書ハ委々議論あれは往てさうむとこの  
外の去嫌ハ御今 苧環 通俗志 等ふとさうむ

畧 せむ

指合 貞享式さう合とさう合とさう合と

き耳ふくらぬゆゑあり數字ハ送字も旧式より輕  
とさうむ二五ハ山とさうむとさうむ語路の拍子の耳ふく

らぬハ二以下ハ決してさうむとさうむ云々余ハ理  
万通とて准へ知るべし但ハ初心のさうむと古

雜







づいぎとト **か** 発句の外願のまよとく今夕  
多くいせむ **か** 多しありとまりありぬむつのも

まよ **か** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
あり **か** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
知或いれでこまよまよ **よ** せよ  
さよの類二夕去あり、 **よ** よの下

ぞとぞ **つ** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
まよ **つ** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
つ二夕去 **つ** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

ある、あれ、あれや、あれじ、ならん  
皆附夕 **な** 成の字の意あれが附  
と嫌ふ、 **な** 夕も打越もきらんぞ **な**

つふ **な** 並びるも打越るも嫌む **な** 深川集花  
野ハ錦あり **な** 盛り御室の路の人通 **な** 麥と菜種乃  
作例多し、 **な** あれや、ならん、ならん

七句去あり、一座 **何** の字、幾の字 附夕と嫌  
三ツとあ **何** 三ツとあ **何** 三ツとあ **何** 三ツとあ

きら **あ** 五夕去 **あ** 物ふわりそのふわり  
えむ **あ** 夕 **あ** 夕 **あ** 夕 **あ** 夕 **あ** 夕

皆二夕 **ら** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
去あり、 **ら** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

ん **ら** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
去 **ら** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

ア **う** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
もろ **う** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

や **ま** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
折合と嫌ふ疑 **ま** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕

け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕  
け **け** 二夕 二夕 二夕 二夕 二夕







ふとわらむ **宇陀法師** 詩六 花と櫻と思ふ作者の  
 著 唐詩の花ハ牡丹あり吾朝詩奇の花ハ櫻あり連俳  
 の花ハ櫻ありとあり牡丹もあらず花ハ貴族の惣名  
 と任まざるハ花ハ櫻付る事あり何ぞ花の句櫻ふ  
 らむ花ハ櫻つらる事あり茶の出花藍の出花正  
 花とてと先師芭蕉申されき猿蓑の俳諧名残の  
 花ハ櫻ありこれを見誤る正花ハ櫻をる人もあらけ  
 り櫻正花ありあり初心よるこもあらず口傳あり云

**春の正花** **花ハ杜鵑** 古式夏とハ貞享式  
 今按むる漢家の

詩ハ杜鵑とも蜀魂ともいひ暮春の景物あり  
 ハ幸ふ其例と假し暮春の用とあまきぎふ本よ  
 了鶯の巢ハ結む決 **心の花** 春のはの部花心  
 して春と定むべし云 の条ハ注を詞の

花ハ正花ありむと暮春のはの部ハ花字の  
 るこれ正花あり故らるる省くたづみ見らるる  
**夏の正花** **若葉の花** 貞享式今按むる  
 月花ハ凡雅ハ一卷の

飾あり踏きける物ハ加減し四季と自由配ふ

べり若葉ハ花と結びて決して夏と定むべし云  
**残る花** 夏ののれ部 **餘花** 夏のよの  
 小注しる 部ハ注を **秋の**

**正花** **花火** 夜分 **花相撲** 植物 **花燈**  
 あり **花** あり **花** あり

**籠** 夜分あり植 物 **冬ハ正花** **歸花** **餅花**  
 物ハありむ

植物ハ二 **雜ハ正花** 一書ふハ雜の花ハ花前ハ  
 句去あり 至て夏冬の季出る時

花と附る用とてとされと次の附句ハ春季とや  
 るとてハ例ハ花と重しとて蕉門の捌あり云  
 昔藍云蕉翁のくそられらるるハ及むと諸門

人の俳諧ハ雜の正花とてとて好むまじき  
 事ハ **作花** 植物ハ二 **花塗** 漆の事あり **花**  
 や **句去あり** 植物ハ非む

**ういらぎ** 鞘較ハ模 **茶の花** 食類あり  
 様あり 植物ハ嫌



花形 小鼓あり植 花子 狂言

燈火の花 植物あり 花の川 食類

花紅葉 青藍云 炭俵集 貫之が梅

角句と秋季うつましく正花とせる例あり

貞享式 我家ハ詞とめて意とせ

一字より嫁と娘とと野老傾城の各目と

當句ハ意の姿情多きときハ例の詞と意とせ此

汰わゆる意ハ陰陽の道理ありハ三句より五句ハ

時小をびひて意と二句少て捨まじき故あり云

支考云意の一条ハ今式の大事ありて意ハ一句少く

捨まじき陰陽の理のとひてその外ハ未然不定

りごとあらん其故いんとあまを詞の意ハ字ハあれど

心の意ハ句ハある故とその時その句ハむを

句情ハ兼てさるるたハ此項の附句ハ普請

場の飯も一度小起とるハ常の先小とて手拭

との附句ハ普請場の臺所ハ只今膳と居んとて

りの埃と掃ちまふわより起出る人もわと折釘

の手拭と常小かけ及ひ越まき出と大工木挽

の立まきとて物の世話きさみあるを三句目の作者

意とありて打越のそびと轉せんと起情の附方を

案として思ふはわらぬありのつれあてとい傍輩中の

あひあらしめあまむ前句の作者ハいうて意の心ハ

々とも後の眼力ふさごとと意の姿情と見附られ

バ彼と我との二句とありて意ハ決して二句とりあべし

○青藍云蕉門ハ意の詞とて定まらぬハあはれ心の

あつひ言葉のそらきあて意あぬものも意句

とらあまを作者のそらきとをれだばあまらふ意の

詞ふあづと句作まづりて許六云晋子ハ句ハ物さ

し狂男のそらきと云ハ意の詞一字カあり



とく踏込る意の句あり近年俳書とて意の詞と梅  
 ぐくはその人の胸中せまきことまきり云〇意の詞ハ  
 意の志そのふ多くあつても彼ふやぐりくこふハ  
 あまうと記ししむる注譯とく初心の便とん  
 こい 逢意、別意、忍意、恨意、待意、待  
 り意、思上意、思下意、絶意、絶て久し  
 き意、互愛意、契る恋、あうる恋、物思ふ、うき  
 意の奴、意衣、意草、意の病ハ 思ひ、思ひ川、  
 深き思ひ、思ひの山、思ひの烟り、斤思ひ、相思ひ、  
 思ひの情、うらみ思ふ、思ひの洲、思ひ草、思ひ花、  
 思ふ、情、深き情、薄情、情、あげの情、情とそ  
 る、情、つぎ情、  
 等閑の情と、泪、泪の淵、涙の海、涙の雨、  
 りへる心あり、泪、泪の露、袖の海、涙の瀧、  
 袖の雨、涙の川も海も、恨、うらみの山、恨、句  
 泪とくくくくあり、恨、の海、うらみ、夢、  
 ふより恋、夢の通路、夢のうらみ、夢のたぐら  
 りあり、

雅語譯解夢の

駕入、婿入、婚礼、待女郎、貝  
 桶

新枕、若後家、若衆、寺若衆、町若衆、男色、美  
 少

念者、男色とて、一の谷、六弥、大屋敷、段室、管元、美印、行  
 是の隠居さぬ、御子息の六弥太、ぬとら

同手ぐらゐの親子の中、畧親ごさぬちやとのうらみ、わ  
 のやう大事ふさつと、い、且那の念者で、い、あ  
 まい、おとこ念者と、兄分とのふき、の、親分とい、あ  
 たり、下、畧、玉海集、附、句、い、たり、と、き、う、ぬ、念、者、ふ、た、き、の  
 限光、別の袖、逢夜、密言、兼、逢、年、つ、

言、私言、文、千話、  
 袖引、尻つる、門あさる、辻あさる、  
 前、  
 可くせ、おのり入住めるあさりと、事



契 ちぎりの末、あが契、二世の契、ちぎら契 伊達、身 いであて、み

獨寢、人目 ひとりね、ひとめ、人目の関、人目と恐 目 め、神祈 かみね

憂別、うき人、色 うれいべつ、うきひと、いろ、色このめ、色も速、ま ま

名 な、み み、み み

心 こころ、待 まち、鏡 かがみ

十寸鏡、占 じゅうすんかがみ、うらひ、占方 うらひかた、占 うらひ、夕卦 ゆふけ、占 うらひ

姿見鏡、占 すがたみかがみ、うらひ、口占 くちうらひ、灰占 はいうらひ、夕卦 ゆふけ、占 うらひ

人の詞 ひとのことば、思 おも、人 ひと、形見 かたちみ、出家落 しゅつが、らく、諸 もろ、白髮 はくはつ

坊主 ぼくしゅ、おとし、哥比丘尼 かひきうに、骨董集 東海道 名所記 万治 卷の 卯本

比丘尼 ひきうに、名 な、其中 そのうち、小声 こゝろ、哥 か、比 ひ、丘 きう、尼 に、の の、あり

て て、う う、う う、て て、勸進 くんじん、中 ちゆう、界 かい、給 たま、と と、も も、ち ち、と と、哥 か、を を

かん かん、を を、う う、と と、も も、云 い、々 々、青 あお、藍 あゐ、按 お、ぎ ぎ、う う、ふ ふ、色 いろ、と と、賣 う

も も、あ あ、り り、故 ゆゑ、不 ふ、意 い、の の、詞 ことば、よ よ、り り、せ せ、も も、あ あ、り り、い い、ひ ひ

ち ち、の の、け け、肌 かわ、ぬ ぬ、も も、媒 まへ、恪 くわく、氣 き、口 くち、子 こ、

二 ふた、心 こころ、縁 えん、諸 もろ、白 はく、髮 はつ、

蓮 れん、の の、上 うへ、の の、契 ちぎ、父 ちち、子 こ、結 むす、の の、神 かみ、

懸 けん、想 そう、心 こころ、文 ぶん、賣 う、水 みづ、祝 いわ、ひ ひ、春のけの 同みの部 小注を、

常 じょう、陸 りく、帶 たい、筑 つく、摩 ま、鍋 なべ、同みの部 小注を、 夏のつもの 部小注を、

雜 ざ、喉 のど、寢 ね、冬 ふゆ、の の、お お、の の、部 ぶ、小 こ、大 だい、原 げん、の の、雜 ざ、

き き、子 こ、を を、お お、ろ ろ、も も、仇 あだ、ら ら、喉寐として出注を、 願 ねが、ほ ほ、ぞ ぞ、 實情 じつじやう、薄 うす、



してたぐひ恨らう恨ら  
らぬつ奇をよきとせよ云

垣間見 物のひまより

虫の印 むしの印は守宮の印

肘おぬくわけは二期消うせむと云く春心と動くせは忽ち消るなり博物志ふと云く守宮ハ蠅蛭あり石

龍子と名く守宮の名ハ秦の始皇帝官人の私けりん事をおひてその朱と飼ひて宮人ふ点ま故

小守宮の名 轉合中戀 て中をて取らる

ふ意 薄中心中、やりあり、惚るる、

ゆるる心、後よび 後妻と うそわらふ

和名抄後妻、和名宇波奈利、 うそあり打 うそあり打と云ハ妻と離別して

後の妻をむつるふそのまてふよりく前の妻とて一き女とむとめく其の日某の時うそあり打ふ

ゆくごよとらひゆり某の日ふ至れむ前妻とえじ  
めとてまごう女どもものくまあひやうのひのま  
わちて後の妻のく行臺所より入て打まると  
後の妻のくあてまてくき女とらぬまて打ま  
て用意をまてくふあらしまて前妻後妻  
の嫁せりの妻と待女郎はありし女と双方の中ふ  
入あつひあてめてくまありいひふ男とまて  
事いせざりくまあて 台記 室物集 ホム後妻打の  
ことええれ古くよりあり事あり 玉海集 夕浅  
芽生ふるもあり打のちまて 貞徳〇醒齋云永  
禄元亀のころまて有 よやうあつひ き  
ぬく 曉起 着る心より意の別と衣々とり入やき  
下紐、身とあつひ、指切、髪切、股 わ  
突、尻目づつひ、思ひこま 羊未深く



よめりたる中の人の中言う又思ひの外いつそ偽り、

難面、うとあも、あつらひ 仗、背きくくの

中、可くうせと年ころうふつく思ひたる中の互ひ、  
心中小恨じことの出来て解あきらまるあり、それより

何事も背き、あつらひ 後、艶、物の怪、

意の恨ふよりあせ、あつらひ 後めとき、雅語譯解後

生霊死霊とり、あつらひ 枕あらざる、長枕、二つ枕、  
うそ枕、手枕、

ウサンナ、キガユルセヌ、あつらひ 近まらざる、近くてこれば遠目より

とり入意あり云、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

偽り、

難面、

中、

何事も背き、

意の恨ふよりあせ、

生霊死霊とり、

ウサンナ、キガユルセヌ、

とり入意あり云、

近まらざる、

近まらざる、

近まらざる、

近まらざる、

近まらざる、

近まらざる、

近まらざる、

近まらざる、

近まらざる、

近まらざる、

近まらざる、

近まらざる、

よめりたる中の人の中言う又思ひの外いつそ偽り、

難面、うとあも、あつらひ 仗、背きくくの

中、可くうせと年ころうふつく思ひたる中の互ひ、  
心中小恨じことの出来て解あきらまるあり、それより

何事も背き、あつらひ 後、艶、物の怪、

意の恨ふよりあせ、あつらひ 後めとき、雅語譯解後

生霊死霊とり、あつらひ 枕あらざる、長枕、二つ枕、  
うそ枕、手枕、

ウサンナ、キガユルセヌ、あつらひ 近まらざる、近くてこれば遠目より

とり入意あり云、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら

近まらざる、あつらひ 近、見捨ら



ありその木ハ一尺をりありて五色小彩りてその  
中なる錦木と云ふ也詞花集あめひつひくふ立初る

錦木の千束あつてりゆりゆりも  
がぬ匡房の外古奇なかり  
誓文、起請きあやう

男女ふひふ神文  
かきぬる香女のひとくを  
る時ふい穿るる

香のおつり重  
肉陣肉屏天室遺事楊國  
忠冬月常小婢妾

の肥大ゆる者と前小行列て風と遮りむ蓋蓋  
人の氣を藉て相暖む故ふらまを肉陣と云ふ  
後

宮禁闕中美人  
の在所と云ふ美人の名、美人と畫

漢書王穉字ハ昭君漢の元帝の官人也云西京  
雜記元帝後宮既ふ多し常小見るとを得む乃ナ

画工として形と畫せりら画と案してらまを幸ふ  
諸官人皆画工は賂も獨王昭君をも遂小見るとを

えむ白奴朝小入て美人と求め関氏ふせんも愛ふ  
於て上面と案して昭君と以て行々む去小及んで



召て貌とて小後宮才一とて帝とと悔む名  
藉已不定る帝信と外固小重んを故ふまこ人を

更む乃チ其事と窮案して画工と市小  
垂つ、云く漢書琴操木の説述ふ異し、返返竟

香李夫人ハ李延年の妹武帝の夫人あり返魂  
香のこゝろハ世人のあふとてらあまを畏まこ

空燒薰物留伽羅、袖の移る香  
化粧化粧

紅粉、白粉、丸紅、的、黛眉掃、  
鉄粉曹

匂ひ袋、不二額、九額、密男

妹許ゆく、女のゆく、紅絹白陀羅尼堂の  
わらりと笹の水

支考う服あり、これ恋匂ふわらむ匂ひ体ふよるを

夫さいハ東國の方言夫、婦ひふつまと称せり



女房めぼう 女房、男房もと官人の称あり、今いま 立女たちめ、  
夫つまの妻つまをいふく女房といふ、

外婦げふ 房ばう 寝所より閨中くわんちゆうハ、  
宮中の小門あり、花街はなまち 遊里ゆうり、乳  
守うしの里

室の津、神崎、江口、大磯、祇園町、  
浅妻船、吉原の里、嶋原の里、新町の里、  
吉井樓きせいろう 妓門きもん、  
浮身宿、同船、遊女ゆうにょ、  
遊女ゆうにょ、傀儡女、遊君、  
妓家、揚屋、  
此の君、雛妓、宿出女、夜祭

辻君、女郎、た、  
開卷一笑了、髮妓かち、  
老女、一夜妻、  
傾城けいせい、傾城、傾国ハ元美人の称、  
老女らうにょ、誤あやまり遊女ゆうにょとす、  
禿かぶ

の幼稚なる者、  
鴉老あやら 妓樓の  
紋日もんじつ、水みづあ

げ、まひ付煙草、つけどし  
飲のけり、  
酒と飲のて

れと付つき、比翼ひよく座ざ、忍しのび編笠あまがし  
むり吉  
原の里へ

かう入者、泥町どろまち、今の田の茶屋ちやゑつて編笠あまがしとくくつり  
一、事ハ世人の志こころ所ところあらはれしとく、種彦たねひこ云いハ編笠

とくりどおのれが家よりくぐりゆくと、  
手編笠あまがしまも手前編笠あまがしともつり、  
江戸吉原の花街中、後朝ごあす雨あめふるときハ今と賣うまり、  
こまと曉あけ今いまとらふ、五元集ごげんしふ郭公かくこうあつき今いまをのせ  
けし、  
其角そのかく 七なな八はち 瀟蕩せうたうやて仁義礼智忠信孝悌  
のハツと亡なふもろ名なつく、  
如ごと

樂がく 舞姫まひ、  
白拍子しろはくし、伽がやらら、  
江戸まで舟饅頭、大坂ふ  
て伽がやらら又またびんびんとよ

野郎やろう 色いろ 陰間かげま 男色おとこいろとひき  
くものあり、  
飛子とびこ 旅たび鹿か  
間ま、

神媒かみま 正字せいじ通と路史ろし、女媧にょわ、正姓せいせい、  
姪めい、婚こん同どう是ぜ、日にち神媒かみま、

切字きりじ 貞亨ていこう式しき、むりより切字きりじの事ハ、十八字の品  
あり、和哥わがゆも連哥れんがやととの沙汰さたあれど、  
例の何なにゆもやととの故ゆゑとあるま、童部どうぶの心経こころきやうよむ  
ゆりて、自己じこふ分別ぶんべつすることあるま、中なかつ古ふるの俳  
諧はいかいうら、の多くの名目なめいあれど、  
連哥れんがの用もちあら

へま、今の俳諧はいかいの次つぎや、  
同体どうたい別用べつりようのことあり、

雑ざつ



るべしとて切字の用とるべし物小對して差別の  
 義あり、そは是とて増とてけて物とニッふま、故小  
 始あり終ありて二夕一章の発句ととあり、九切字  
 の品とつゝ、或ハ一字の働あふやの字よの字の類  
 とのひ或ハ餘韻の助字ととせらるゝの字むの字の類  
 とのふ其外ハ何誰ととていふ哉来と治定まると迷  
 惜と動けハ静るといふ物ハ相對の道理あり、  
 発句の切とのいひて字と定むるふハ及びど耶と  
 うとび鳥ととね哉来と治定まるとたとい道理と  
 あくぬ人もおのつら発句のさふとあれどあり、我家  
 ふハ心切とらひ中の切とらひ、挨拶切とらひ名ありてと  
 ハ心詞といひのせむ、遣ある切字ハあり、○青藍云切  
 字ハ心と切、句意と首尾とせんがとあり、  
 へ定とる切字ととて心切首尾とくといふるハ発句  
 あり、但し心ととらむ、下夕ふ  
 及びとと平夕の格と、例ハ何故やと  
 その増ととらむとき、い作ハ自在の働有し、

中の切

猫の恋やむ時、はの朧月、芭蕉  
 虎くとして、いと月雲

心の切

いとらむ。雪見小つらふ所まで、  
 やうて死ぬけしきハいへむ。蟬の声

挨拶切

世と旅ハ代りく小田の行度り  
 人ハ家と買せて我ハ年忘

二字切

君火とけよき物とせん。雪九け

三字切

子供らよ。昼顔咲ぬ。瓜むる。

二段切

夕まも。朝あも。つるも瓜の花  
 空甕も。空也の瘦も。寒の内

三段切

梅。若菜。まり子の宿のとら汁。

とまは

青とと有へき物と。唐とらじ  
 米とら友と。今宵の月の客

おまは

桐の木小。鶉鳴ふる。燗の内  
 袖の花よ。昔ふのそん料理の間

玄妙切

春ややとらきこと。月と梅  
 わらくと日ハつれあも。秋の尻



大まのし

辛寄の松を花より臆して、  
行春とあやしの人とくさるる。

無名の切

名月の花をこころにて棉島、  
一家をな枝ふら髪の墓赤、

中の切も、挨拶も、二段切も、三段切も、とまきくも、ふま  
くも、無名の切も、まじく心切ふまど、名目とまきくも  
ハ、初字のよ、  
口合のや 是やこの煤うらま  
らぬ古格子 芭蕉

切や

朝がむや昼の鎖か  
うも門の垣 全 捨や 露とく心こみ  
浮世もがむや

中のや

旅ごとくや浮  
世の煤くらひ 全 ものや 白奥  
や黒

法の綱 全

き目とわく  
すこのや むえんやふ甲の下  
のきりくも 全 じし

のや

庭掃て出まや寺  
ふちる柳 全 名所のや 難波津  
や田螺

冬籠 全

疑のや 梅白しきのふ  
しあき人の小袖も今や土用干

此や疑のや、上小疑のやあるとき、下ふいさあき  
嬉しき恋しきのき文字、ありしミの過去の一文  
字、又ハふのぬ或いたるるづるあまの詞とも結  
ふあり、又くすつむむるんのもむひはれも唯ぞ  
のや何の両用とらるるさうりくく如く結び詞のあ  
らまき、語格とくのもむ、但し味のやあ結び詞い  
らぬ、  
あひ抄うあも全く同  
あり、  
あひ抄うあも全く同  
あり、  
あひ抄うあも全く同  
あり、

と疑ふ

あひ抄うあも全く同  
あり、

その外の名ハ

あひ抄うあも全く同  
あり、

ハ切は

あひ抄うあも全く同  
あり、

ふのぬ

あひ抄うあも全く同  
あり、







わのひ抄 その大むひとあしそりてつらひ心あり

里言のオモキヂヤ、ヤウスヂヤあどりふは似たり 古今

よつて川をみちりてあはれ わのひ抄 ナア

ゆりまらふ錦中や な と人ふひつる

詞あがり思ひあままりていひて を

く 曠野 二日よめつりいせ 花の春 芭蕉

炭俵 いそぎ 春と雀のうき わのひ抄 其

袴酒堂この類のそ切 い ときわひを

ちるふくわりて ま あり なり たりて

とそり ま あり あり あり

ま ま あり あり あり

詞あり ま あり あり あり

わのひ抄 あ あり あ あり あ あり あ あり

と あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

ふ あ あり あ あり あ あり あ あり

神祇の格

尊さふれ御合ぬ御遷宮 芭蕉  
猶さふれ花ふ明ゆく神の顔

雑

同じ類の詞あむもどもの落着 か あり か あり

と決定し や あり や あり や あり や あり

自然と や あり や あり や あり や あり

古今 春の夜の闇 あ あり あ あり あ あり あ あり

ね香や あ あり あ あり あ あり あ あり

し心 あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり

いふ あ あり あ あり あ あり あ あり



釈教の格

涅槃会や撥手合とる数珠の音、  
灌仏の日ふ生れぬ鹿の子うね

戀の格

紅梅やうめ恋つくる玉簾、

無常の格

せと死ぬるきこころは蟬の聲  
冤祭くつも焼場のくつりうね

追善の格

秋凡ふとれてくねき桑の杖  
當歸より哀ハ塚の菫草

迷懐の格

ふとる和脍の緒やうく年の暮  
父母のまきうふこひ雉の聲

羈旅の格

ひとつ脱てうらふおぬ更衣  
年くれぬ笠きこ草鞋をぬら

餞別の格

鮎の子の白魚送る別くれ  
此心推せよ花ふ五器一具

名所の格

五月雨ふくれぬ物や瀬田の橋  
松島や千々ふこころ夏海

即興の格

景清も花見の座ふハ七兵衛  
ひりまけ秩父のくく角力取

昼圖の格

粽ゆふう手ふとむ額髪  
降とくし竹植る日ハ暮と笠

昼讀の格

山吹や宇治の焙炉の白ふ時  
わらじの俳諧とく入ぬる胡蝶

晝字の格

奈良七重七堂伽藍ハ重櫻  
昼顔ふひるぬせうもの床の山

時宜の格

梅白しきのあや雀とぬれまけ  
やとる木ヲ猶やう木や梅の花

時宜とハ其時ハ眩ミ其人ハ對シテ情ト述るとその  
前の一章ハ野さらししの紀行ハ三井秋風ハ山家と訪  
ふとる端書ありくおとと林和靖よりとる  
時宜あり後の一章ハ曠野集ふ出て細代民部息  
ふあひてとる端書あり句意ハ笈日記ふこれハ  
其父弘氏の主此道の風雅ふ名ある故あべ云

賀の格

先祝へ梅と心の冬こもり

雑の格

くらまが杖突坂と落馬哉  
あさよとこふ誰松島とくこ心











江都

須原屋茂之衛  
山城屋佐之衛  
岡田屋嘉七

尾州名古屋

永樂屋東四郎  
菱屋孫之衛

勢州津

山形屋信吉衛門

京都

吉野屋仁之衛  
株屋勘之衛

阿州徳島

天満屋武之衛

姫路

本莊典次

訪州徳山

浅田屋孫之衛



